【213】

氏　名(本　籍)	柄木田　明　子（東京都）
学位の種類	博　　士（文　　学）
学位記番号	博　乙　第　1,300　号
学位授与年月日	平成 9 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	農村社会の名誉と住民意識：オーストリア・ケルンテン州 N 教区の民族誌
主　査	筑波大学教授　文学博士　牛島　巌
副　査	筑波大学教授　理学博士　石井英也
副　査	筑波大学助教授　関　一敏
副　査	電気通信大学教授　二宮宏之

論文の内容の要旨

本論文は，オーストリア農村の民族誌である。論述を通じて，今日の「ローカルの世界」は，過去から受け継いだ価値を，現代世界に適合するように再構成している人々の集団であり，そのプロセスをともにすることによって住民意識が生成されることを，個別性を強調する方法をとって描き出している。論文は，序論（1，2章），第一部（3－5章），第二部（6－10章）そして結論（11章）から構成される。

序論の第一章「問題関心とアプローチ」は，民族誌研究が抱えている問題を整理し，農村社会を閉鎖的にとらえて類型論として収束した農民研究の伝統と，文化の意味の解釈に傾斜した民族誌学とを統合する試みとして本論文を位置づけるとともに，経済行動とそれを支える価値やモラルとの相互的な関係に注目する視点と，その手法を提示している。第2章「N教区」では，調査地の輪郭を地理的・歴史的に描き，「ローカルの世界」を互いに理解可能な価値意識を共有する者がつくる社会ととらえる立場を表明している。農業経営の資源をひとまとめにして総称する「ハウス」，自立した農民としての「バウアー」，自立した生活のできない小さいハウスの所有者としての「コイシュラ」，労働力を提供する者と位置づけられる「アルバイター」などの，住民自体のカテゴリーが，家族経営ばかりではなく，農村の価値体系と深く関わる点に注目すべきであることを主張している。

第一部と第二部の論述では，現地調査に基づくデータを論述に組み込む方法をとり，また教区記録からの家族復元，世帯構成票の作成，土地台帳や地籍図の利用など複数の資料を相互に参照して，住民の姿を個別性・歴史性を生かして描き出す工夫をおこなっている。第一部「ローカルの経済システム」は，地域経済のシステムを明らかにしながら，経済行動に埋め込まれている価値の体系を考察している。第3章「イディオムとしてのエステイト」は，バウアー（農民）の多様な資源をセットとして把握することによって，農家経営がシステムとしてとらえられることを示し，このセットをエステイトと呼んで分析を進めている。土地利用のあり方と大きさ，そこで飼養される家畜の数は相関関係を持ち，家畜の生と死，その成長のサイクル，人間の成員補充と排出，相続と結婚は，エステイトのシステムに従って展開する。このシステムにおいて，エステイトは人間の行動を方向づけるイディオムとしてとらえられることを提案している。第4章「エステイトの周辺に位置する住民」は，エステイトを所有しないコイシュラやアルバイターがエステイト経営に参与し，他方しばしば移動して，エステイトから独立した雇用関係にも参加する，両義的な存在であったことを明らかにしている。その際，「城」がこのような住民の受け皿であったと同時に，ローカルの歴史意識を醸成する存在であったことを論究している。第5章「現

代社会における農村住民」は，技術，交通，通信手段の変化に，住民がどのように対応しているかを解明している。バウアーも賃金労働に関わるようになり，他方，エステイトの周辺的な成員だったコイシュラやアルバイターは，ローカルの経営を脱して，広域にわたる経済活動に参加するようになる。彼らは職場との間を往復する「ペンドラー」（賃金生活者）になった。

第2部「ローカルの価値の体系」は，以上の記述を踏まえて，住民の日常生活を律する価値体系の展開にかかわるテーマを論述している。第6章「教区記録からみた人格の概念」は，教会記録を資料として，住民が人を分類するカテゴリーの体系が，ハウスに準拠するカテゴリーから職業に準拠するカテゴリーへ変化していく過程を，丹念に整理している。第7章「人格の表象としてのバウアー」は，日常生活における行動や言説に埋め込まれた名誉の意識を考察する。「勤勉」と「もてなし」がバウアーの名誉の行動で，もてなしは婚外子・養い子の受容，老齢親族の扶養，貧者への宿の提供などをも内包している。バウアーの名誉の行動は，ハウスの所有と経営に基礎づけられている。今日，生計活動を外の世界で行う賃金生活者（ペンドラー）も，「ローカルの世界」ではバウアーの手間仕事をアルバイターとして請け負うことで，この名誉の体系を支えている。つづく二つの章は，このハウスに基礎づけられた価値の体系が，現代において再構築される局面を論述・考察したものである。第8章「hausen：動詞としてのハウス」はペンドラーがハウスをつくる過程で，部分的であるがエステイトの生活様式を取り込んでいることに注目している。ここに「（バウアーが）堅実にエステイトを（継続的に）経営する」というhausenの意味が受け継がれていて，それは名誉の体系を考慮することで理解できることを示したものである。第9章「世帯間関係としてのファミリエとハウス」は，現在のハウスが特定の者との間に，「養育や介護のサービスを実践する」ファミリエという関係を生成する過程を分析している。ファミリエに対するサービスの実践を通じて，ペンドラーのハウスは，名誉を実践する意味のある空間として現出してくることを論究している。第10章「墓地にみるハウスとファミリエ」は，ローカルの価値が再構築される過程を，墓の維持とその展開過程の定点的な観察を通じて検証している。女性のライフ・ステージに即応したサービスが，死者・墓・ハウスを相互に結びつける動態的な構造を形成していることを解明している。

第11章「結論：現代におけるローカルの世界の構成」は，エステイトがローカルな資源に基礎づけられていたのに対して，現在のハウスはモデルとしてのエステイトをミニチュア化して，その価値の再構築を実践しているが，ローカルの外の経済体制に依存していることを論究している。この矛盾を克服しようとする営みの中で，ローカルの世界と外の世界の境界が生成され，それが住民意識を構成している，と結ばれる。

審査の結果の要旨

このオーストリア農村の民族誌は，日常世界を分節するハウス，バウアー，コイシュラ，アルバイターなどのカテゴリーに注目した論考である。民族誌としては，1，エステイトでの生活について，社会・経済・文化にわたって厚いデータを提示している，2，ハウスにくわえてファミリエというキイ概念によって関係性のふくらみと重層性を描き，かつそうした関係の生成と変化を明らかにしている，3，ハウスをめぐるバウアーの論考に留まらず，それ以外の人々の戦略的対応の記述によって，社会関係に潜む名誉の概念とそれ故の葛藤を描いているなどの特徴をもつ作品である。文化人類学の領域でも，社会史の領域でも，ヨーロッパのローカルの文化を対象とする民族誌の試みは数少ないが，本論文は，数次にわたる長期の現地調査にもとづき，オーストリア農村社会において機能している価値の体系について考察を行ったものであり，未開拓なこの研究分野における貴重な貢献として高く評価することができる。それは以下の点である。第1は，ローカルの世界における価値意識の解明という問題意識が明確であり，全編を通じて一貫した論の展開がみられる。第2は，限られた地域の民族誌的な視点とマクロな社会経済史的な視点の分別，対象地域の切り取り方の方法などを整理することから始め，人類学の現代的状況をふまえた問題提起をし，それを乗り越えるための積極的な研究の枠組みを提示している。第3は，

野外調査で得たライフヒストリーなどに関するデータを記述に繰り込むなど，個別性を重視する方法を採用することにより，「ローカルの社会」の意味や価値の体系を明らかにすることに成功している。第４は，バウアーという人のカテゴリー分析に見られるような，対象社会の日常的な認識それ自体をデータ化する工夫が見られる。第５は，教区薄冊，地籍図，統計表，世帯構成票などの活用による家族成員の系譜の復元，土地利用の記述，生活の変遷の復元，家族成員の変遷表示など資料操作に工夫がみられ，記述に説得力を持たせている。

本論文はローカルな世界の価値の体系を個別・具体的に描いている点で評価できるが，他方，１，現代ヨーロッパについての民族誌的研究として，Ｎ教区のような社会構造を持つ地域を調査対象に選択したことの意味を，より自覚的に問題化する必要があって，ヨーロッパの土地制度史や経済史に位置づける課題が残されていること，２，近現代のヨーロッパにおけるローカルな世界を問題にするに当たって，財産の所有を前提としエステイトをイディオムとする農民世界と，それに変化をもたらす外部世界という対比の構図がどこまで有効であるかを，より広い視角のもとに再検討する必要があることなど，若干の問題が残されている。

本論文は，以上の残された問題があるにしても，数次にわたる長期の現地調査にもとづいたオーストリアの農村において機能している価値の体系について透徹した論考をおこなった博士論文として，新知見をもたらしており，学界への貢献がおおいにあると認められる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。